雜錄

懺悔としての哲學

故野崎廣義

『懺悔としての哲學』は野崎君が始めて本誌に寄せられた論文である。さうして今はそれが最後の論文となつた。吾等はこの事を思ふ悲しみに堪えない。此の論文は初め大阪朝日新聞に掲載するつもりで書かれたのであるが（次に掲げたのは即ち夫れで、六月廿五日の同紙に載せられたものである）其後君の意に充たざる所があつたであらう、再び稿を改めて本誌に寄する爲去る六月十六日夜を徹して此處まで書かれたのであるが翌日の夕方卒然として逝かれたのであつた。終りに載せた斷片は實にこの絶筆である。前項の「論理的に就て」は大正三年十一月哲學會大會に於て同君が試みられた講演の草稿であつて今之を發表するのは恐らく故人の意志に背くことであらうが吾々は君を慕ふ至情にたえず敢てこの遺稿を請ふて茲に掲載することにしたのである。野崎君は明治二十二年四月八日富山縣射水郡七美村字野寺村に生れ、同三十四年四月富山縣立富山中學校に入學、第四高等學校第一部をへて明治四十二年九月東京帝國大學法科大學に入學せられたが思ふ所あつて翌年京都帝國大學文科大學哲學科に轉じ、大正二年七月卒業、同九月より大阪朝日新聞社に入社せられたが翌年辭職し、大學院に入學して專ら哲學の研究にいそしみ傍ら智山觀學院大學及眞宗大谷大學に哲學概論、哲學史、論理學等を講せられつゝあつたが大正六年六月十七日午後八時遽かに病を得て逝去せられたのである。

野崎君の著作としては以上の二論文の他に大學卒業論文として提出せられた「カントの純粹論」を初めとし「藝術と哲學」（大正四年三月）「無限を追ふ心」「哲學史の本質に就て」「運命」（大正六年）等の諸論文がある。殊に哲學概論の講案は君の最も心血を濺がれたものであつて獨創の思想に富み優に一家の體系を組織せるものであつた。大學院にあつては主としてヘーゲルの哲學を研究せられ、學殖深く思想高邁、鋭き論理と豊かなる感情と深き體驗とを兼ね備え、加ふるに嚴肅なる講學の態度を以てし、吾等の齊しく嘱目する所であつたが齡未だ而立に達せずして遽かに逝かれたのはたゞに吾等の悲しみのみにつきぬであらう。若くして稀なる天分に惠まれた君は同時に運命の苛酷なる犧牲者であつた。君の哲學は實にこの矛盾の痛ましき懺悔である。吾等は茲にのせられた君の絶筆を涙なしには讀むことができない。（中川得立）

私にはこの四五年といふものは闇を衝いて沙漠を旅ゆく生活であつた。

光の消滅せるところにはすべての窮屈な空間的約束が破られて不可思議の世界の扉が開く。豫言

者が桶の水の一滴さへも漏らない間にこの世の端から端を騎り廻つたのもこの時であらうが凡夫が肉と骨とを脱ぎすてゝ涙の河に其命を洗ひ淨めるのもこの時である。しかし豫言者の顯はす不可思議はまだ不可思議でない。不可思議は凡夫のうちに現はれるから不可思議である。

不可思議は現實と空想との縫目にその姿を封じてゐる。故に不可思議に遭はんとするものが現實のうちに沒頭する限りは不可思議を字引のなかに見出し得るだけである。空想の中に沈湎する限りは不可思議は詩の行と行との間に隱れて了ふ。不可思議は凡夫が何ものかの鐵腕によつて現實と空想とのどん隅に押しつめられ身を飜へさゞるを得ない時に見出す實在である。下手に飜ればわが命の行方さへ解らなくなる境地である。それは黑暗々の無底坑である。そこでは涙が笑ひ闇が輝く。

かゝる境地はこの世の眞中に住むものには夢にも見えないところである。しかし半ば斷崖から脚をはづしてゐるものが生きて行くにはとてもなくてかなはぬところである。天才と動物にはどうか知らないが凡夫の淨土は確にここにある。私の沙漠旅行はどうやら遂にこの不可思議境に足を入れたものらしい。私は之を今迄やつた學問の習慣に從つて便宜上眞理と名付ける。

私は生活の明るい時代にも考へぬではなかつたがそれが暗くなつた時にはなほさら考へざるを得なかつた。それでも現在から過去をふりかへると、その時考へられたことは只呼吸してゐたに過ぎないとも思はれる。現在の私はこの無底坑の暗中からひたすらすべてを見つめたいと思ふ。何となれば私はこの中から匐ひでればまたこの中に飛び込まなければならない身分であるのだ。私はもはや現實からも空想からも見離されてゐる。そこには私の住むべき空間がない。だから私にはこの

坑をほかにして現實も空想もないのである。をかしいことにはさきに巨大なる世界であつたかの現實と空想とは今になつて見るとこの坑の入口に懸つてゐる蜘蛛の巣であつたのだ。思想上これにひつかゝることを言葉と論理に囚はれるともいふ。眞理の戸外に立つて怖る〳〵これを窺ふものは常にこの蜘蛛の巣で顔をまつ黑につゝまれる。

斯くいふものゝこの眞理の中に於て見んとするもの——眞に考へんとするものは決して論理を無視したり言葉を斷絶したりなぞすることはない。單なる言葉の斷絶論理の無視はさらにまた蜘蛛の巣にかゝることである。必然を抽象した自由は自由を抽象した必然と共に蜘蛛の巣の役を務めるだけのものである。絶對自由は絶對必然と一つである。これを思想に於て體認するには自らの生命を論理の中に投げ入れわが魂を言葉の中に織りこまねばならない。これは一見大なる矛盾のやうである。何となればかやうになつては蜘蛛の巣にひつかゝるどころか蜘蛛の巣自身になつてゐるからである。これがさきの現實と空想とを脱却したものゝ狀態であるとはどうしても受けとれないやうである。しかし現實と空想とに眞實呑み盡されたものが却つて現實と空想とを眞實呑み盡してゐるものであるといふことが認められるならばこれが受けとれないとはいはれまい。もつとも後の事實が一層奇體に見えるかも知れないが今のところは奇體は奇體のまゝで許して置いて貰ひたい。思辨に奇體はつきものである。

上のやうな考へには論理自身が飯を喰ふことになりもしやう。否それどころか論理自身が喜怒哀樂そのものにならなければ思索に身を委ねるものに何の眞實、何の力があらう。如何に思想の大體系を持つてゐやうとも如何に多くの言葉を知つてゐやうとも要するにお目出度い面々であるといふ

のほかない。かやうなものには涙も笑はず暗も輝かない。

無底坑の眞理は論證されるものでもなく論證すべからざるものでもなく自ら論證するものである。併し妥協の論理はつねにこの最後の事實を認めることができない。或ものは眞理は論證せらるべきものとして中心點に一向近かぬ木馬のやうに只その周圍を廻轉する。或者は論證すべからざるものとして赤道に立つて極光を思ふやうに光るものはわが見ると見ざるとにかゝはらず光るといふ。死せる概念の壘壁を築き上げることによつて滿足のできるものにはそれで結構であらうが絶望の深淵に臨んでひし〳〵と戦ひ慕ふところの眞理はかゝる外面的な論理ではその姿を見せて呉れない。

眞理の爲には學者は自己の最愛なる學問をさへ塵芥の如くすてねばならないこともある。ドストエフスキーの「罪と罰」に於けるラスコルニコフはそれがためには殺人も敢てした程執着せる外面的論理を脱落した時に彼の眞實なる生活の幕があいたのである。かくて眞にソニャを愛することができるやうになつた。否寧ろ彼がソニャを眞に愛することができた時始めて外面的論理を脱落したともいはれる。ソニャとは彼の最後に求むべき眞理を象徴せる可憐の少女である。この究極眞理との内面的交通とゝもにラスコルニコフのVita nuova―新生が輝きいでたのである。私はこの新生こそ哲學的思索のうちに住むものにとつては眞實の論理であると信ずる。

自己のこれまで辿つた生活を新生の光に照らして見るならばすべてが罪惡であり嘘僞である。新生は罪惡の自覺と共に始まる。それは氷の中に焔の燃えた時暗の中に暗が光つた時である。罪惡は罪惡の自覺に於て生れる。新生は罪惡を滅ぼすも

のではなく、むしろそれを認めるもの、生むものである。思想上認めるものは卽ち生むものである。故に新生の始まらない前には罪惡といふものがない。新生の發展は罪惡の發展である。而して新生に入ることはいふまでもなくかの無底坑に降り立つことである。現實と空想とはこゝから見つめられて始めて生れる。兩つのものは罪惡といふ名に於いて始めて神の世のものとなる。罪惡ならざる現實と空想とは淨土にとりては用のないものである。

たゞず眞理に於て考へるといふことは少くともその中に身を投げ入れたものには新生の發展である。從つて神自身ならば知らぬこと現實と空想の中から飜つて來たものにはそれはたゞず自己の罪を悔ゆる過程である。懺悔がないならば哲學がない。故に眞に考へるものは皆罪人でなければならない。考へざるを得ないやうな境遇と性格とを以てこの世に現はれたものは只肉と血に包まれた骸骨として觀るならば決して樂しい生を亨けたものではない。かゝるものは聖なる恩寵に照らされなければ決して生きて行くに値ひせないものである。聖なる恩寵とは眞理によつて自己の罪惡の遂に許されざるを知ることを許されたる無上の權利である。この權利は聖像の前の啜り泣きか手を組んで深く胸に首垂れることに依つて實行すべきものである。ヴエルレーヌは彼の胸に懺悔の念が强くこみ上げて來た時、若し彼がノートル、ダムの聖母像の前に跪かなつたとするならば彼は深き〳〵瞑想に耽つたであらう。この場合にはどうしたつて歌ふことができない。最も貴い哲學は許されざるに透徹するところに成り立つ。

若し私の生活に哲學といふものが意味深いものであるとするならばそれは懺悔の哲學であるべきだ。何となれば眞に考へるといふとは懺悔であ

るからである。思想の發展とは懺悔の純粹になり行くことである。かやうにして一時私は懺悔は眞理の前に於てすべきである。外界に自己の取るにも足らない思想を發表するのは無意義なものであるとさへ思つた。しかしよく考へて見ると自己と眞理との內面的關係を觀る所に眞に考へると云ふこと卽ち懺悔があるものだとするならばわが思想、わが懺悔なるものは私一個の思想、懺悔として胸中に閉ぢこめて置くべきではなく萬人の前にさらけ出すべきである。しかし懺悔としての思想の告白は世を敎へんが爲めでもなく又自己の論理の鋭さを衒はんが爲めでもない。懺悔が眞に懺悔であるが爲めに萬人の石に打たれんが爲めである。ソニヤがラスコルニコフにいつたではないか『街に立つて通行人の前にあなたの人殺しであることを叫びなさい』眞理を熱愛し眞理に從順なるものは當にこの聲に耳を傾くべきである。眞理は恒に自己の前に於てのみならずすべてのものゝ前に於て懺悔を要求するソニヤである。眞理は決して許すものではない。この決して許さないところに眞理の大慈大悲がある。これに依つて凡夫が超人となる。眞理自身が若し優柔であるならば人間は遂に蚯蚓になり下がつて了ふに違ひない。

哲學者はできるだけ論理的に嚴密ならんとしてゐる。これは哲學史を繙くならば何人にもすぐ氣のつく事柄である。現代の哲學者も亦益々この方面に努力してゐる。しかしこれは何の爲めの努力であるか。私の所謂懺悔としての哲學に於てもこの論理的嚴密が要求せられるであらうか。然り哲學は懺悔であるが爲めに愈〻論理的に嚴密ならざるを得ない。のみならずこれがために、嚴密であることが何の爲めの努力であるかゞ明瞭になるのである。

思想の嚴密とは許されざるに透徹して懺悔の一

念に根據を有せなければ強き要求として現れ得るものではない。單なる嚴密の爲めの嚴密は言葉の遊戯である。勿論懺悔としての哲學から見れば人世のことすべてが遊戯である。哲學自身さへ遊戯である。しかし懺悔の一念に徹してゐるところはすべてが嚴肅である。嚴肅とは眞實なる要求から流れ出でたる嚴密を指す。

或はこれに對して懺悔としての哲學は理論的ではない、實踐的である、故にそれに依つて得られたる嚴密は實踐的嚴密であつて理論的嚴密ではない、前者に依つて後者が得られるとするのは實踐と理論とを混同したものであるとはいはれるかも知れない。斯樣な疑問は普通誰れにでも起り易いところである。殊に哲學者は思索と名付くる水晶の高塔に世俗を超越して先天の夢に耽るべきものであると考へるものは懺悔の哲學はお說敎に墮落したものであるとするであらう。併し乍ら理論と實踐との限界は如何なる約束に依つて成り立つものであらうか。哲學と說敎と手を別つところは何に依つて定められるのであらうか。哲學に於て自己の懺悔を見るものはすべての約束と豫見に幻惑されないことを努めるだけである。只管根本的ならんことを熱望するだけである。自己全體を無底坑の中に投げ込むだけである。而して深く强く自己の罪惡を悔い思ふ。但し罪惡といふと餘りに狹い意味にとられ易いのであるが、私のいふ罪惡は人類の祖先が知慧の實を喰つた時に始つた人性の活動一般を指すのである。斯樣なものは人間各自の內に潛んでゐる。之をあらはに自覺せる者には懺悔が始まる。理論と實踐、哲說と說敎との對立を超越したる至深至高の哲學が始まる。

かゝる哲學は聖なる恩寵の中に生ける論理であつて一切に超越しながら一切に同情を感ずる世界苦痛の自覺である。眞の哲學者は自己苦痛自己罪

惡を世界苦痛世界罪惡として自覺するものである。こゝにもう一度ラスコルニコフにふりかへる。彼がソニヤを愛することが出來た時彼が今迄嫌ひ且つ嫌はれつゝあつた同じ獄屋に繫がれてゐた囚人と心から溶け合ふことができるやうになつた。かくの如く彼が他の罪人に同情ができるやうになつたのは彼は眞理に向つて眞實自己を懺悔したからである。今はドストエフスキーの小說に現れたるラスコルニコフが果して哲學者であるや否やは私にはどうでもよろしい。只私が眞實と信ずる哲學は彼に於て見られるやうな內面的過程を經て生るべきものだといふことを示さんとするばかりである。

現代の哲學者の多くは文明批評、文化支持を以て自己の誇るべき天職であると考へてゐるであらうがその意氣や頗る壯とすべきである。併し彼等はこの職に任ずるといふことは極めて大なる十字架を負ふことであることを決して忘るべきではない。彼等は果して自己に於て世界苦痛世界罪惡を眞實に自覺して懺悔の一念に徹してゐるであらうか。若し然らずんばメフイストから笑はれるのみか神からも笑はれるであらう。

もつとも今迄私が述べた告白と要求とは明るい世界には通用しない暗から暗への言葉であるかも知れない。（五、一二、一三）

懺悔としての哲學

私にはこの四五年といふものは、闇を衝いて沙漠を旅行く生活であつた。私の心の內となく外となく、生きんとする意志の行くてには、はてしもない運命は、恐しい暗黑を渦卷いた。今は其一齣々々を想ひめぐらすだに、えも云はれぬ戰慄を感ずる。ロマンチストは、暗夜をこの世にまたと

ない自由の境として歌つたが、私の閲歴した暗黒は、プラトーンがエルの神話をかりて述べてゐるやうに、ありし世の殘遺なる帝王が、永へにのろはれて暗から暗にさ迷ふ、あの姿であつた。實際、私は、人生といふものを、まだ陰影に於て見なかつた時代には、眞夏の光を受けて、孔雀が羽根を擴けてあるくやうなほこりと自由とを感じた。自己の誇りと自由の感は、自己の輪廓の鮮さである。何ものにも自己の要求、すなはち生活の論理を强ひ得る自負である。私はその時分には、常に眞理と云ふものが、自己の掌中にあるものだと信じた。しかし、それは　我儘勝手な眞理であつた事は、あたかも暴君の劍のやうなものであつた。私はその劍でもつて、向ふところすべてを薙ぎ倒し得ると信じ、凡てに向つて猪突した。私は、ゴルヂアの結目と云ふものゝあるのを知らなかつた。また、よしかやうなものに遭つたところで、それは解くべきものにあらず、斷つべきものだと思つた。私は眼に見えるすべての問題に於て、不可思議を見ることができなかつたのである。問題に於て不可思議を見ないといふのは、問題の尊さを知らないことである。すべての問題をお茶にするといふことである。すべての問題を無造作に屠つてしまふことである。私はその時分パスカルの、人間は考へる葦の葉であるといふことを、餘りに安易に受容れてゐた。而して余りに葦の葉の身分でもつて、劍の暴威を逞うした。しかし相手を切つたと思つてゐたのは、却つてみんな私自身が切られてゐるのであつた。私の誇りと自由とは燥狂の夢みるたわいもない幻であつたのである。結局私は繫縛のどん底に陷つてゐたのである。若し私が生きて行かなければならないやうに神が定めたものとするならば、私はこれまでの生活といふものを、逆に導かなければならないのであつ

た。何となれば、生きてゆくといふことは、ほんとうに自由であるといふことだ。繫縛を逆に解いてゆくといふことだ――しかしこれはたゞのちつぽけな人間としてできることであらうか。自己のうちに、眞夏の光、孔雀の羽の輝きを仰ぐ狂人にできることであらうか。Idolapspecus をながめ見あかないものには、眞理の世界は暗黑の世界と見えるものであるといふことであるが、かく自己を、光だ、輝だと信ずるものが、暗の夜に讃歌をさゝげるほどの雅懷をどうしてもちえるであらうか。

そこで、私が現在生きてゐると云ふ事實は、私以外のある大いなる力を豫想しなければならないことになるであらう。その恐ろしい力が、私のあの生活を逆轉せしめて生活の本流に導いたものと考へなければならない。それは卽ち運命である。自己の因襲的生活に隨順する何ものに於ても、運命の姿は意識されないものである。すべて自己の脈搏のひゞきにけをとされてしまふ。運命の意識はつねに、自己の因襲的生活に逆行するときにはじめて意識される。だから運命は昔から、おそろしいもの、眞くらなもの、厭ふべきものとして考へられてゐる。肉體的生命の否定である死が、運命のもつともあざやかな象徵であるとされるのも偶然ではないのであらう。とにかく私自身に姿を現はした運命は、氷山の中からでもすべりでて來たやうな冷酷なものであつた。その魂に突き當る鋭さには、あの花やかな光も輝もすつかり消えてしまつた。私の魂は、何かな暖いものを、何かな光つたものをと、盲滅法にあたりを撫で廻はし、狂ひ廻つたが、やはり、はてしもない暗やみと冷さがあるばかりであつた。私はかやうにして、始めて不可思議の世界の扉に手を掛けたのである。兎に角私の面と面を接したものは、その姿の明確であると云ふ點から云つたなら、むしろ深

刻であると云つた方が適切である。何となれば、暗やみそのも(のも)冷かさそのもの(も)觀念や表象の鏡に寫つた反映ではなく、力そのものであつたからである。ところが、これまで自己の對象となり、問題となつたとこ(ろ)のものを握りしめなければ承知のできなかつた私は、この明確過ぎる程明確な問題の前を、絶えず逃げ去らうとあせつたのであるが、あせればあせる程、運命はその姿を明確にして、卽、暗黑と冷さはいよ〳〵はげしくなつて來たのである。私はこゝに、未だかつて自覺しなかつたディレンマにはまつたのである。私は始めて、明確な認識必ずしも自己の受用するものではなく、自己の受用しないところのものが、却つて自己を追及して止まないとがあるといふことを悟つた。但し、とがあるといふ言葉は特稱的表現であるけれども、生活のその時その場合にあたつては、それは全稱的の力でもつて現はれ來るものである。力として現はれて來た斯樣なディレンマの前には、只不可思議、それも死ぬるばかりの不可思議を感ずるだけである。それは現實と云ふには餘りに矛盾し過ぎてゐる、妄想と名付けるには餘りにゆきつまつてゐる。

（之れ以下を欠く）

陰鬱な梅雨が幾日も幾日も續いて身にも心にも黴の生へた樣な六月十八日の朝であつた。起き出でて顏を洗つたばかりの所へ、野崎君が前夜友人と散步の途中、心臟麻痺を起して仆れたといふ知せがあつた。余は野崎君とは始終遇つて居たのであり、特にその二三日前、コバレヴスキーの微積分を返しに來て、スコトゥス、エリューゲナを借りて行つた君が突然此世を去らうとは誠に思ひがけ

ないことであつた。併し事實は動かすことはできない、病むこともなくして逝いた君の面貌は尙生けるが如くであつにが、何物かを求めて休なき樣に見えた君の眼は長へに閉ぢて、君の靈魂はもはや此の世のものではなかつた。君は大正二年京大哲學科を出られた秀才であつた、まだ何も書かなかつたから世に知られやうはなかつたが、君を知れる少數の先輩や友人からは前途を囑目せられて居た人である。君は學者として立つに十分なる思索の深さと鋭さとを有して居たのみならず、君の哲學の根柢には君自身にも照し得ざる深い或物があつた。君の心の底にはtitanicな或物があつた。ソフォークレスの戯曲の中に見る樣な暗い運命が君の心の奥を支配して居た樣である。君は此の如き暗い力に動かされると共に、一面に明かな透徹した頭をもつて居た。此の如き人が深き心の苦惱に陷るのは自然の成行である。君が近頃ドストエ

ウスキーを愛讀したのも故あることと思ふ。此意味に於て此處に揭げた「懺悔としての哲學」は他の論理的のものよりも却つて能く君の面目を顯して居るものである。此文は君が昨年の暮、朝日新聞の爲に書いたものであるが、意に滿たずとして發表せなかつたものである。併し今度「哲學研究」の爲に之を書き直すといふので、死去の當日、夜の一時頃より書き出して朝までに七八枚書き直したさうである。されば此文は眞に君の絶筆であつて、又最も能く君を現すものと云つてよい。余は此小文を讀むにつれて君の眞摯なる態度を思ひ自ら胸迫り涙落るを禁じ得ない。君は早くからヘーゲルの哲學を喜び絶えず之を研究して居た樣であつたが、近頃はプラトーだのアウグスチンなどにも深い興味を有つて居た樣である。知れる人の死ぬるのは言ふまでもなく、知らざる人の死も死は人生の何事にもまして悲しいものではあるが、又

一方から云へば知れる人の死に行くにしてもその死が自己の中から何物かを奪ひ去られた様に感ずることは少ない。野崎君の死は余に取つては自己のいくらかが奪ひ去られた様に思はれ、一種の寂寥を感ぜざるを得ない。

西田幾多郎記す